

句でも作つてみたらどうか……と薦めたのは自分であつた。

會つてホトトギスの記念會の際のテーブルスピーチに、三笠宮殿下が起たれて、俳句と病弱が何か因縁があるかのやうだが、虚子先生がかうして、鑿鑿として俳句の先達をされてゐるやうに俳人もどうか健康であらいたい……といふ旨を仰せられたが、正にその通りであるが、その意味では弟の病身を見越して慰安的な俳句のすゝめかたをした譯になるが、然しそれは必ずしもさうでは無くて、その頃自分は國民新聞に勤めてゐたが、それは恰度文學欄ができて虚子先生が擔當された時であり、左衛門、温亭、青峰、落魄居の諸氏と机を並べてゐた編輯局での日常から、不圖弟に薦めたといふ譯であつた。然しそれがやがて彼がその道を以て闘病の一生を心の糧とし得たことは倅であつたとせねばなるまい。

もと／＼彼は病弱にもよるが、生活面の能力の乏しい方であり、父母の方の不如意にも依つてその中年は氣分的には不自由だつたことだらう。たゞ龍子の亡妻（茅舎より四年後に死去）が龍子に代つて好き理解者で終始に世話……と云つても之も持病があつて日常の世話は焼けなかつたが、それは龍子の實妹に任せて、物質方面は面倒を見てゐたのだつた。たゞ龍子は自分の健康に任せて、病氣には同情が無い……とは亡妻もよく零してゐたことだが、それは正にその通りであるかも知れない。かてて加へて茅舎にしても、亦亡妻にしても死期が悪かつた。兩者とも七月中旬であり、龍子にとつては秋の展覽會を控へての最も大切の時期なのである。病氣には冷膽とは云ふものの血縁の死期の愁歎を畫事の方に煩ひされまいとする焦心事に或は餘人には通ぜぬ心境であるかも知れない。そして又一面には、龍子はその傷心を畫事に依つて糊塗しつゝあつたのか

も知れない……。

前後したが、かうした環境を経て兎も角も茅舎が句作に専心打込めたのは大震災が境では無かつたらうか。大震災には龍子の家は損害の程度で済んだが、父、異母、そして茅舎の安否が不明なのである。日本橋蠣殻町は勿論焼野原である。普通の火事なら立退先の立札位はあるが全く尋ねやうも無い。あのどさくさに、助つてゐれば訪ねて來るだらうと心待にしてゐたが、それからどの位の日が経つてからか忽然と茅舎が無事な顔を見せたのだつた。火から免がれて早速に信州の澁温泉に避難してゐたのださうだ。暢氣といふのか手廻しがよいといふのか此方は晒然たるもの。そして茅舎はその脚で京都へ出向いて、前々からの懇意だつた東福寺の正覺庵に寄宿したのである。之からが本統の意味での彼の云ふ京都時代が始まるのである。

ところで彼がどうして親の膝下を離れたかといふと、震災前から父母は商賣を換へて藝者屋を始めてゐたのださうで、潔癖な彼はそれを嫌つての遁避なのである。ところが昭和三年にその母が死去。そこで無理にもと龍子は小家を大田區桐里町（現在は大田區池上本町に青露庵茅舎居として保存）に建てて父を迎へ、そして茅舎も同様さしたのであつた。といふのは龍子は實母を引取つてゐる關係から、異母の在世中は父の方でも遠慮があつて、自然大震災にもそのまゝに信州へと避難したらしいのだが、異母が死去の上はその心づかひも無くて、父は素人繪を描いて樂しみ、茅舎も亦句作専念に、彼の生涯の中の安定した時代ではなかつたらうか、その父は八年に安樂往生。ところがその頃からの茅舎の肉身は、反比例に病魔に浸蝕されつゝあるのだつた。そしてその病症たるや所謂病氣の間屋と云つた状態で、彼を永く治療された病院長は、「茅舎君のか